

巻頭言

「国際化と日本語」

町 田 健

日本で使われている日本語は、母語としての話者数は1億3千万に上るから、フランス語やドイツ語の母語話者数よりも多い。だから、この点では世界の諸言語の中でも、日本語は重要な言語に属する。最古の日本語文献は、紀元8世紀に編纂された『万葉集』や『古事記』であり、それぞれ韻文と散文による高い価値をもつ文学作品である。ただし、紀元前8世紀に書かれた世界第一級の作品である『イーリアス』と『オデュッセイア』を擁するギリシア語の後塵を拝していることに間違いはない。しかも、ギリシア語最古の文献は、紀元前14世紀にまで遡ることができる。

現代世界で最も高い威信をもつ言語である英語が、アングル語、サクソン語、古ノルド語などを基礎として形成されたのは、紀元後5世紀頃である。当時どのような日本語が使われていたのかを知ることはできないが、日本語が形成されたのはそれよりも遥かに前であることに疑いはない。英語による最古の文献は、10世紀頃に書かれた叙事詩『ベオーウルフ』だとされる。この時代、日本では『古今和歌集』が編纂され、最古の仮名文字表記による散文文学である『土佐日記』や『竹取物語』が書かれた。そしてその数十年後の11世紀初頭には、日本が世界に誇る作品『源氏物語』が現れている。この偉大な文学作品に比肩しうる英語による文学作品が登場するのは、シェイクスピアの創作になる一連の優れた戯曲が書かれた16世紀後期である。

このように日本語は、歴史でも文学作品の価値でも、英語を大きく凌駕している。表現力において日本語と英語に差異を認めることはできないから、両者の言語自体としての価値を論ずることに意味はない。しかし、言語がその黎明から産み出した資源の総体を考えると、あるいは日本語が英語に勝っているのかもしれない。日本語の話者からすると、ならばこのような

高い価値をもつ日本語を永遠に守ると同時に、世界のできるだけ多くの地域に使用者を拡大させたいという欲求が生じるのは当然のことに思える。使用者の多寡を問わず、いかなる言語を用いるいかなる民族にも、固有の母語を愛するこのような感情は常にあっただろう。ただし、個々の民族が自分たちの国家をもち母語を維持するという民族的な思想が一般化するのには、ようやく20世紀になってからである。それまでの世界は、古代ペルシア帝国、ローマ帝国、オスマン帝国、オーストリア＝ハンガリー帝国に代表されるような、強大な権力者の一群が多数の民族を支配するという形態か、帝国主義により植民地化される前のアジア・アフリカ地域の一部のように、国家のような枠組みを持たない大小の部族が群居するような形態が、何千年にもわたる人類の一般的な社会のあり方だった。

したがって人類全体の歴史からすると、たとえ日本語であったとしても、その価値と存続が当然のこととして容認され保証されることはありえない。強力に国際化が叫ばれている状況は、少なくとも言語的には、かつての大帝国と同様に、高々1つの有力な言語が広大な地域に渡って公的な場面で専ら使用されるというようなものになろう。そのような状況で影響力をもつ人間として活躍するためには、その支配的な言語を自在に操る能力を身につける必要がある。明治時代以前の日本でも、貴族や武士のような支配階級は、漢文、つまり古代中国語で公文書を書き、洗練された漢詩を創作する高い能力を要求された。「グローバルな」世界に属する有力な国家としての日本において、政治、経済、学問などの領域で活躍しようとするならば、日本語の重要性は当然のこととして認めつつも、漢文に代わる言語としての英語の深化した知識と高い運用能力が求められるのは、蓋し必然的なことなのかもしれない。